

＜今日の説教のポイント テモテへの手紙Ⅰ 1章12～17節＞

1 (12a) パウロは強くなった？ その意味は？ 強くなれた理由は？

誰でも強くなりたいと思います。ここでもパウロが、「私を強くして下さった、私たちの主キリスト・イエスに感謝しています」(12)と語っています。しかしパウロは、「私は弱いときにこそ強い」(Ⅱコリント 12:10)とも語っています。パウロが知らされた「強さ」とはどのようなものなのでしょうか？

2 (12b-15) 最たる罪人を赦すことのできる神様の圧倒的な強さ。

この後、パウロが15節まで語っていることは、まず、自分はどうしようもない人間だった、主イエスを信じず、むしろ信じる者たちを死に追いやることに熱心だった(使徒言行録 26:9-11)、ということです。それから次に、そんな罪人(ハマルトーロス)であった自分を主は赦し、救って下さった、と語っています。つまり、ここで大事なことは、パウロが「私を強くして下さった」と言う時、パウロは自分の強さを考えているのではなく、どうしようもない罪人に愛想をつかし、怒り、罰するのでなく、赦し、救おうとされる、途方もない神様の強さを考えているのです。私たちがこのパウロから倣うべきことは、自分の罪深さを深く知る者となることと、その罪深い私たちを憐み罪赦して下さる破格の度量の大きさを持たれる神様を覚えて生きる者となることです。パウロは2節で、いつもと違い、この手紙で「恵みと平和」だけでなく「憐れみ」も加えていますが、ここ13, 16節で多用しています。憐れみと恵み(14)との違いは、やはり、その対象を憐れみ(哀れみ)愛おしんで下さる思いが含まれている点です。主イエスは、十字架の上で、自分を十字架に架けて殺そうとしている人々のことを思い、「父よ、彼らをお許し下さい。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカによる福音書 23:34)と祈られました。パウロは、私たちも、イエス・キリストを通して自分が自分の罪を分らないで生きて来たことに気づき、そしてそのことを神様は私たちに気づかせようとして下さり、気づいたときに神様は赦して下さるお方なのだ、その大きなあふれるばかりの恵みを覚えて生きる者となろうと呼びかけているのです(14)。キリスト者はもう自分の強さや弱さに目をやるのではなく、この神様の強さに目をやって生きる者なのです！